

6 祭りのゆくえ



芳賀 日向
HAGA Hinata 祭り写真家

自然災害、少子高齢化、人口減少などの社会変化とともに、日本の祭りは変わってきている。カタチを変えて存続する祭りもあれば、消えゆく祭りもある。祭りを継承させる意義とはなんだろうか。様々な問題を抱え、変わりゆく祭りの姿を追う。

被災地の夏祭り

2011年3月11日、驚愕の東日本大震災の後、関東各地では相次いで祭りの自粛や中止が発表された。自粛・中止となった主な祭りは、5月が日光東照宮の『春季例大祭』百物揃千人武者行列、東京の『神田祭』『三社祭』、7月が『隅田川花火大会』（後に8月末に延期開催）、8月が『東京湾大華火祭』などである。また、規模を縮小し神事だけを執り行った祭りは、日本各地で多数に及んだ。「今年1年間、祭りの写真は撮れないのだな」と私は思った。

ところが4月12日、被災地の青森県八戸市の市長より『八戸三社大祭』（7月31日～8月5日）の開催が発表された。「夏祭りを復興の象徴とする」との声明だった。続いて、宮城県塩竈市から『塩竈みなと祭』（7月18日）、宮城県仙台市は東北の六大祭りが一堂に集まる『東北六魂祭』（7月16～17日）の急遽開催が決まった。また『仙台七夕まつり』は「鎮魂と復興への願い」を込めて、例年通り8月6～8日に開催するなど、続々と被災地から夏祭り開催声明が発表された。その一方で、自粛・中止になった日光東照宮付近の旅館や土産物屋からは、震災後に観光客が激減したうえに、例年3万人もの人出で賑う祭りが中止になり、悲鳴があがっている



写真1 相馬野馬追で祈る女性 (2011年)

写真2 見事に復活し大歓声を背にして走る『相馬野馬追』の騎馬武者 (2013年)

ことがニュースで放映されていた。

関東では祭りの自粛発表が行われ、東北被災地各地では夏祭りの開催声明が続く。ここに祭りの原点があるのではないかと思ひ、6月から8月初旬まで被災各地の祭りを取材した。

私に関心をもったのは地震、津波、原発事故の三重苦に苦しむ福島県相馬市と南相馬市で行われる『相馬野馬追』と、町すべてが津波で流され消失してしまった岩手県陸前高田市で800年続く『うごく七夕』。

平将門に由来をもつ『相馬野馬追』は千余年の歴史

があり、騎馬武者が500騎登場し戦国絵巻を思わせる。相馬野馬追執行委員会は6月17日に記者会見を行った。そこで発表されたのは、メイン会場である雲雀ヶ原祭場が緊急避難所となっているため、ハイライトの「甲冑競馬」「神旗争奪戦」は行わないが、「総大将出陣」をはじめ、そのほかの行事は「復興のシンボル」として、3日間にわたり全て行うという内容だった。

一方、陸前高田市では5月に有志の会のHPに「夏の開催に向けて必死に努力をしています」という声明が載った。しかし13台あった山車は、2台を除き流失してしまっていた。「大石地区の山車が泥の中に埋もれているのが見つかった」とのニュースが掲示されると、延べ2千人にもなった全国のボランティアたちが動き、泥に埋まった公民館が洗われ、中から山車が蘇った。

『相馬野馬追』

この年、『相馬野馬追』は7月23日から3日間行われた。人も馬も津波で流されてしまい、騎馬武者は80騎の出場だった。

初日、私は太田神社の神事を撮影していた。そこに一人の祭り衣装の女性が現れそっと手を合わせた。その清楚な美しい姿に心を打たれ、後日彼女に当時のことを聞いてみた。「家では代々馬を飼い、『相馬野馬追』に参加している。なんでこんなことになってしまったのだろうか。来年は大きく開催されますように」と祈ったそうだ。

翌年も『相馬野馬追』を訪れた。そこに広がった光景は280騎の騎馬武者が甲冑姿で雲雀ヶ原祭場を勇壮に駆け抜ける姿であった。困難を乗り越え、震災前と同じように復活した姿に、4万2千人の観客から大歓声がかました。相馬の人々の誇りと意地が伝統の祭りをつないだのだ。

『うごく七夕』

祭り前日の8月6日に大石地区公民館を訪ねると、青空の下に色とりどりの紙できらびやかに飾られた七夕山



写真3 陸前高田市の『うごく七夕』。津波に流された駅前通りを山車がゆく (2011年)

車が置かれていた。寄付により新しい太鼓が届き、有志の会の会長が思いを込めてドーンと一発叩いた。

大石地区では住民600名のうち150名が亡くなり、250名が避難をしている。とても町の人だけでは山車を曳くことはできない。そこに全国からボランティアたちがやってきて飯の炊き出しを行い、地区の人たちと一緒に山車を曳く。元は目抜き通りであったJR陸前高田駅へ続く道は、全くその面影がない。『うごく七夕』は、七夕飾りで飾られた山車を曳き、太鼓を叩き、お盆に帰ってくるご先祖様の霊に帰る場所を伝えるものだ。この日、太鼓を叩いた青年は「ご先祖様、私たちの土地はこんなになってしまいました。でもここが故郷です。帰ってきてください」と、涙ながらに犠牲者を追悼した。

翌年、再び現地を訪れた際には、ボランティアを中心とした運営組織ができて、山車も8台となっていた。ボランティアたちによる出店が町の中心に立ち、小学校の校庭にはステージが作られ、夜はコンサート会場として賑わった。ボランティアたちが中心となって曳いた山車が中央広場に集まると、一斉にバルーンが空に放たれた。伝統の祭りはボランティアたちの手により一大イベントとなった。

2018年にもこの祭りを訪れた。町の中心には大規模ショッピングセンターができ、その周りを10台に増えた山車が賑やかに太鼓を叩きながら巡った。子供たち、地元の人々、ボランティアたちが一体となった。コンサート会場はなくなり、従来の『うごく七夕』の姿になり、伝統が戻ったことに私はほっとした。

『祭頭祭』

震災による影響以外にも、さまざまな要因により変わりゆく祭りも多い。

茨城県鹿嶋市にある鹿島神宮は、創建が日本の初代天皇とされる神武天皇の元年といわれる古社で、「武の神」として崇められている。3月9日に行われる『祭頭祭』は鹿島地方に春を呼び、人々の健康や豊作を願って行う華やかな祭りだ。

朝、顔に化粧をした狩衣につつまれた5歳ほどの幼児2人が馬方の肩車に乗り、左方、右方から拝殿へ来る。鹿島神宮を中心に南北に分けて、南郷・北郷は、交互に左方・右方となって一字ずつ奉仕する。神占により選ばれたそれぞれ二つの字が左方、右方となり祭りをを行う当番となる。当番の字から1人ずつ幼児が選ばれ、祭りの日には神の化身である「大総督」となる。甲冑姿の大総督は、法螺貝や太鼓の合図でそれぞれ300人を従えて町内の練り歩きへと出発する。

2018年の『祭頭祭』は右方の出陣がとりやめになり、左方だけで行われた。私の宿は例年左方の接待所となっている場所であった。「今年は右方がでないからさびしい」と町の人が嘆いていた。祭りの最後の神事は「神占」で、神様のご神託により来年の祭りに奉仕する字が北郷と南郷のそれぞれから選ばれる。神職が大きな声で「卜定、左方〇〇、右方〇〇」と宣言した。これで来年は賑やかになるぞ、と思った。

ところが、帰りのタクシー運転手から聞いた話はショ

ックだった。神様のご神託の名誉ある来年の奉仕を北郷はその場で断ったという。鹿島神宮北部は新興住宅が多く、移り住んできた世帯が多い。その人たちにとって祭りは金も手間もかかるやっかいな存在でしかないのだろう。多くの字ではご神託が降りても即座に断ることを事前に決めているのだという。2018年に右方ができなかったのはそれが理由だった。私にとって神様のご神託など恐れ多くて断ることなど考えられなかったが、この先があやぶまれる。左方、右方が揃った盛大な祭りになるのはいつのことなのだろうか。

三遠南信の祭り

三遠南信という地区がある。愛知県（三河）、静岡県（遠州）、長野県（信州）の県境をまたいだ地域で、700年以上にもわたり各地で独自の民俗芸能が継承されている。もとは伊勢から来た修験者が芸能を伝えたと言われている。

愛知県の東栄町付近では冬から春にかけて15カ所で『花祭』が行われている。6kgの大きな面をかぶった神鬼が山の神の化身として現れ、人間の魂を清め再生する。祭りで大切な役割を担うのは「花の舞」に登場する幼児だ。可憐な花の舞に里の人は願をかける。この花の舞がないと祭りは始まらないが、少子化により子供が僅かしかいなくなってしまう。もとは長男だけが舞うことを許されていたが、現在は外孫や姉妹都市の子供たち



写真4 『祭頭祭』の大総督。総勢300名を従える(2018年)



写真5 『花祭』の花の舞。真夜中のこの舞から始まる(2009年)

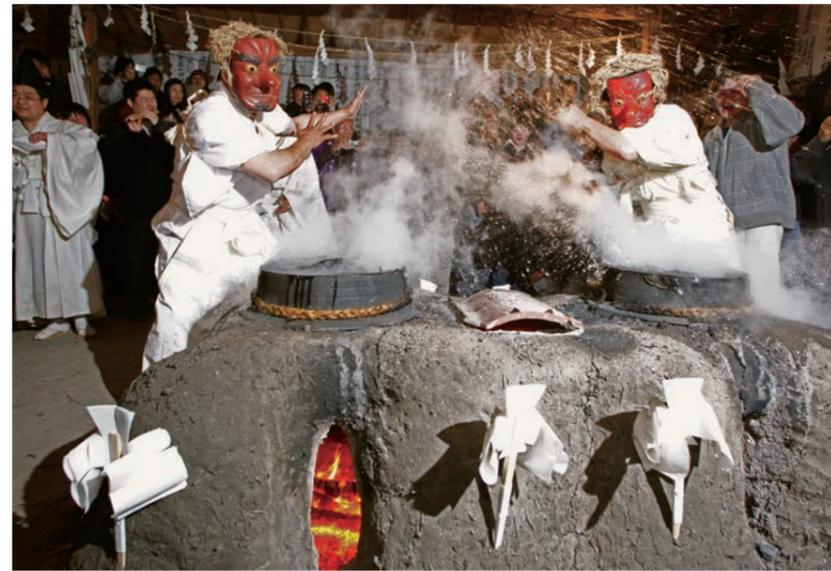


写真6 『霜月祭り』。土地の神が煮えたった甕の湯を手で切る(2008年)

が祭りのために集まり、男女で舞う演目となった。

長野県の遠山郷には『霜月祭り』という、湯を立てた甕のまわりで地元の神々が暴れる祭りがある。戦前に甕は13カ所あったが、2018年は9カ所だった。高齢化による過疎が進み、限界集落となった地区が多い。1世帯10万円近い祭りへの出費は高齢者が多い限界集落では大変厳しく、25戸を割ってしまうと祭りの維持が難しくなると言われている。また夜を徹しての神楽の舞い手の年齢的限界もある。

その集落のうち、いくつかの地区は活気づいている。聞くと「野郎会」という組織ができているという。集落を離れた出身者たちがつながり、ふる里の祭りの存続のために祭りの日に戻ってくる若者たちだ。この野郎会の結成により、祭りが蘇った地区ができた。

2018年、限界集落の八日市場で『霜月祭り』が行われ、テレビ番組でも特集が組まれた。この特集により、村人が祭りをつなぐきっかけとなって欲しいと望んだが、八日市場はこの特集を良き記念とし、最後の祭りとした。

『高浜八幡神社秋季大祭』

長崎市高浜地区には、江戸時代に活躍した力士が地元の出身であ

ることから、秋祭りで奉納相撲が継承されている。最初に行われるのは小学生による神事、そして奉納相撲33番。少子化に悩む地域のため、同じ子供が何回も登場していたがそれも限界だという。最近、女兒が相撲に興味を持ち、小学校などで稽古を始めた。神事が終わったあとの相撲大会には高校生の女子も参加する。役員会では、相撲33番を続けるために女子を登場させるかの議論が白熱した。最後に会長一任となり、2018年の結論は「今年は男子のみ28番の奉納相撲を33番として行う」だった。

変わりゆく祭り

東日本大震災の後、ふる里の意識が人々の間に高まり、祭りはふる里と人をつなぐ絆となった。多くの人々がふる里の祭りのために帰省し、中止していた祭りを再開した地域も多い。一方、災害、少子化、高齢化などさまざまな問題の中で変わりゆく祭りも多い。伝統と変容との間で、継承されているどの祭りにも、次世代へ祭りをつなぐという強い意志をもったキーパーソンとなる人々がいる。彼らの役割こそが、祭りのゆくえに重要な方向性を持っている。



写真7 『高浜八幡神社秋季大祭』。赤ちゃんの土俵入り(2018年)